憲兵の一。(手錠を前にさし出して)『オイ、神妙にしろ。』

グサ素直に兩手を出して手錠をはめさせる。その間も絶えず、踊つてゐる。

スタナ。(揉手をしながら)『オ、聖母様、マリヤ様……お扶け下さい。……お扶け下さい……。』

――幕――

第三幕

イラリヤ、サリイチの住宅。家の構造はグサの家と同じ農家の一室であるが、家具調度類はグサの室に比し遙かに上等である。中央正面の壁に大時計が、かけてある。大卓子の周圍には數個の三脚椅子がおいてある

主人イラリヤ、隣人タンヤ、ピータが椅子に腰をかけてゐる。卓子の上にウキスキーの瓶がおいてある。

ピータ。『イラリヤ父ッサン、此頃はどうしてそんなに悄氣てゐるんだい。まるで沙漠の中で木の實と水計りで暮してゐる人間見たやうな顏付に、なつて了つたぢやァないか。』

イラリヤ。(瓶の口からゴクリと一口飲むで)『どうだね、もつと飲まないかね。』(ピータに瓶を渡す

ピータそれをのむでタンヤに渡す。)

イラリヤ。『俺の胸の中で生と死が相撲をとつてゐるんだ。』

タンヤ。『相撲を取つてゐるんだつて？』

イラリヤ。『俺は悪魔と相撲をとつてゐるのさ。いひ換れば、善玉と悪玉がいがみ合つてゐるのを見てゐるといふ事さ。……（寂しく笑ふ）俺は既う衰弱つて了つて、とてもこの二つの力と闘ふ氣力がないのだ。』

ピータ。『イラリヤ父ッサンの云草は六ケ敷つて、とても解らない。』

タンヤ。『切角去年裁判に勝つたけれども、それぢやア何にもならない。すつかり氣を腐らしてゐるぢやアないか。』

イラリヤ。『皆な知つてゐるかね。』

ピータ、タンヤ。『何を？』

イラリヤ。『悪魔が一番強いといふ事をさ。』

二人とも驚いて椅子から立上り、イラリヤの顏を覗込む。

ピータ。『イラリヤ父ッサン、何をそんなに苦しむでゐるんだ。』

タンヤ。『まるで夢のやうな事をいつてゐるね。どうしたんだ。』

イラリヤ。『悪魔が一番強いといつてゐるのだ。』

タンヤ。『信心深いお前の口から、そんな事を聞かふとは思はなかつた。』

ピータ。『そんな神様を瀆すやうな事をいふなんて、飛でもない。それぢやアまるで、神様を棄て、悪魔に従ふやうなものだ。』

タンヤ。『イラリヤ父ッサン、氣を鎭めてしつかりしなよ。』

イラリヤ、卓子の上のウヰスキーをとつて飲む。悄然としてまた同じ言葉を繰返す。

イラリヤ。『悪魔が一番強い。』

ピータ。『オヽ、オヽ、聖母様。』

タンヤ。（呆れたやうな顏をして）『一體どうしたつていふ事だ。グサの奴は、イラリヤ父ッサンの心まで盗むで了やがつた。』

イラリヤ。『皆の衆、俺の事を悪く思はないでくれ。俺は神様を虔れてゐる。そして俺は神様の目から見たら蟻のやうに小さいものだといふ事を知つてゐる。だが聞いてくれ、全能の神

様は餘り柔和で餘り善良すぎて、迎も敵と闘ふ事は出來ない、それだから惡玉の方が强いのだ。』

タンヤ。『だがそんな言葉を口から出すなんて正しい事ぢやアない。』

再びウキスキーの瓶が三人の間をめぐる。

ピータ。『イラリヤ父ッサン、慥りしてくれなくては困る。明日はお前の家で、お目出たい婚禮があるのぢやアないか。既うすつかり仕度は出來てゐるのかね。』

イラリヤ。『ウム、用意は出來てゐる。』

ピータ。『牛は何匹屠殺したね。』

イラリヤ。『牡牛が二匹、牝牛が一匹だ。』

ピータ。『それや上等だ。お前の家ちやア澤山家畜がゐるからな。豚は？』

イラリヤ。『親豚三匹に子豚が三匹だ。』

ピータ。『それや素敵だ。お前の家は金持だ。それから酒はどうだ。ウキスキーが澤山あるだらう。』

イラリヤ。『倉に藏つてある他に、五箱註文しておいた。』

タンヤ。『素晴しいものぢやアないか。』

ピータ。『それ程の事が出來る身分でゐながら、まだそんな不足顏をしてゐるのは、どうした譯だい。こんな事をいつては濟ないが、俺は父ッサンの事を思ふからだ。』

タンヤ。『素晴しい御馳走だ。いまから俺の胸はわく〳〵する。嫁御の家でも、肉と酒を山のやうに積むでゐる。』

ピータ。『お客は何人招ぶ事になつてゐるのだい。』

イラリヤ。『明瞭とは分らない、それは家内に任してあるのだ。何でも俺の一生のうちで一遍でも會つた人達や、それから村の衆と親類は悉皆招ぶ積りだ。』

ピータ。『夫ぢやア誰を正客にするのだね。』

イラリヤ。『俺はタンヤを正客にしやうと思つてゐるが……』

ピータ。『それで、』

イラリヤ。『俺は最うひとりお客を招いてゐるのだけれども、それが來なけれや、婚禮の祝が出來ないのだ。』

タンヤ。『その客人といふのは誰のことだ。』

イラリヤ。(暫時、躊躇してゐた言悪さうに。)『俺はグサとアダを招むだのだ。』

タンヤとピータは唖然として互に顔を見合せる。沈默。

ピータ。『父ッサンの一番の敵をかい。』

タンヤ。『お前の悴のイリヤを殺さうとしたあの悪黨を招ぶんだつて。』

イラリヤ。(冷かに笑ひながら)『だから先刻から、悪魔の方が強いといつてゐるぢやアないか。』

ピータとタンヤ、すつくり立上つて、

二人。『ぢやア父ッサン左様なら。』

イラリヤ。『どうか歸つてくれるな。』

ピータ。『まだ俺達に用があるのかい。』

イラリヤ。『俺を見棄ないでくれ。俺はお前達は俺の目になつて貰ひたいのだ。俺の證人になつて貰ひたい。』

ピータ。『何の證人になるんだ。』

イラリヤ。『俺はグサの許へ使者をやつたのだ。』

タンヤ。『ヤレ〳〵。』

イラリヤ。『俺は仲直りの證に十圓金貨を持してやつたのだ。』

ピータ、裏庭に面した窓から首を出して、大聲でいふ。』

ピータ。『メイラ小母さん、鳥渡こゝへ來てくれないか。イラリヤ父ッサンが飛でもない事を始めたから、見にきておくれ。』

二場

イラリヤの妻、メイラは腕まくりをして前掛で濡れた手を拭きながら這入つてくる。

メイラ。『どうしたのです。』

ピータ。『小母さん、ちつとお化粧でもしておきなさい　グサが來るさうですよ、ハッハッハ。』

イラリヤ。『俺はもう神様と悪魔の闘を見てゐるのが、やりきれなくなつた。俺はあんな畑なんか、

グサに呉れてやる事にしてるるんだ。』

メイラ。『何ですつて？』

イラリヤ。『俺はあの男に欲しいだくけれてやるんだ。俺は平和を望むでるるのだ。』

メイラ。『臆病な、貴郎は私達が、餓死しても構はないのですか。』

イラリヤ。『何とでも勝手に思ふがいゝ。俺は平和を熱望してるるのだ。』

メイラ。『オヽ聖母様、聖母様、この人は五畦の畑を敵にやつて了ふのです。』

イラリヤ。『俺は彼奴が削取つた五畦を遣る計りでなく、神様の愛の證に最う二畦つけてやるのだ。』

メイラ。(周章て、窓を開け)『イリヤ、イリヤ早く來ておくれ。お父さんは氣が狂つたよ。』

三　場

イリヤ、登場。

メイラ。『イリヤや、お父さんは狂氣になりなすつた。お父さんは私達を餓死させやうとしてるらつしやる。』

イリヤ。(笑ふ)『さうぢやアないよ。お父さんは正氣でしてるらつしやるのだよ。』

メイラ。『だつて、お父さんはグサのところへ使者をおやりになつたよ。』

イリヤ。『お母さん、俺はそんな事を鳥渡も驚きはしない。俺はお父さんがどんな事を考へてるたか、とつくに知つてるた。』

メイラ。『知つてるたつて？』

イリヤ。『俺は感着いてるた。』

メイラ。『お父さんが。あの放火人に畑をやらうとしてるらつしやるのだよ。』

イリヤ。『私は去年から薄々知つてるた。』

イラリヤ。『グサの父子が牢を出てからといふものは、俺は一日として、枕を高くして眠る事は出來ない。彼奴は毒蛇のやうに、俺の夢の中まで、うねり込むできやがるのだ。俺は毒蛇の毒氣に殺されるのはいやだ。……あの父子はまるで颶風のやうに村中の酒場を荒廻つ

てゐるのに誰ひとり手を出す者がない。あの父子は悪魔になると誓を立てたといふ事だ。彼奴は俺を「最うぢき天國へやつてやる」と傳言をして寄越したが、俺は天國へゆくのはいゝが、彼奴の手で天國へやつて貰ふのはいやだ。……夫に俺は何より一番生命が大切なのだ。』

タンヤ。『グサの奴は、父ッサンの骨の髓まで恐怖を植つけて了つたのだ。』

イリヤ。『タンヤ小父さん。それは違ふ。お父さんは自分で自分を苦めてゐるのだ。』

四　場

イラリヤの下僕が這入つてきて、金貨を卓子の上へおく。

下僕。『旦那、まるで地獄へお使者にいつたやうなものでございました。』

イラリヤ。『どうだつた、ちつとはいゝ便りをもつてきてくれたか。』

下僕。『グサは私の顏を見ると、いきなり襟首を捉へて、研澄した剃刀を私の咽喉につきつけて、「手前もイラリヤの手下だらう」と喚くのでございます。私はやう〳〵彼奴の手から遁れて、金貨を見せ、旦那の御言葉を傳へました。「畑も金も仲直りの證だと旦那が仰つた。そして明日の婚禮にはお二人とも是非出席して頂きたい」と斯ふ申しますと……』

イラリヤ。『して、グサは何といつた……』

下僕。『グサは私の口上を聞いてゐるうちに、青くなつたり、赤くなつたり、紫色になつたりしてをりましたが、しまひに薄氣味の悪い笑方をしながら、「ぢやァ畑だけ貰つてくれる。そんな金なんぞ見たくもねえ、……婚禮には事によつたら、悴だけ出席させて、つかはすかもしれねえ。』と斯ふ申しました。』

イラリヤ。『事によつたらだつて？』

下僕。『グサは左樣に申しましたので……』

イリヤ。(下僕に向ひ)『ミルコの許へいつて、「何卒、すぐいらしつて下さい」といつてこい。(獨言のやうに低い聲で)俺の心持を眞個に了解してくれるのはミルコ計りだ。』

メイラ。『眞個に、こんな卑怯な人つて、ありやしない。』(不機嫌な樣子で部室を出てゆく)。

ピータ。『こんな没分曉漢には俺も左樣ならだ。』

タンヤ。『俺も、左樣ならだ。……』

イラリヤ。(悲しげな表情をして立上る)『皆の衆、どうか氣を惡くしないでくれ。』

ピータ、タンヤ退場、イラリヤそれに從ふ。イリヤ暫時三人の後姿を見送つてゐたが、氣を取直したやうに奥へいつて、新らしい酒の瓶と二個のコップを持つてくる。

五　場

ミルコ登場。

ミルコ。『どうしたのだい。』

イリヤ。『まア掛けてくれ。(ミルコに椅子を上へる)是非聞いて貰ひたい事があるのだ。』

ミルコ。『どんな事だ。』

イリヤ。『まア一杯やらうぢやないか。』(コップに酒を注ぎ、二人とも一息に呑ほす。)

ミルコ。『上等の酒だね。』

イリヤ。『親父は、うまくやるらしいよ。』

ミルコ。『何をうまくやるんだね。』

イリヤ。『グサとの一件をさ。』

ミルコ。『そいつはよかつた。で、どんな事にしたのだい。』

イリヤ。『親父は種々なものをグサに贈つたさ。』

ミルコ。『そいつは可笑しいね。』

イリヤ。『そんな事は何でもないさ。……それより、聽てくれ……俺は明日婚禮なぞしないぜ。』

ミルコ。(怪訝な顏付で)『結婚しないつて、夫はどういふ譯だ。』

イリヤ。『これには、十八ヶ月前の出來事が、原因してゐるのだ。』

ミルコ。『十八ヶ月前の出來事とは何だい。』

イリヤ。『アダとの事件さ。』

ミルコ。『分らん、アダとお前にどんな關係があるのだい。』

イリヤ。『俺の古傷が破れたのだ。』

ミルコ。『然し、彼奴はその爲に充分、罰を受けたのだから、最う忘れてやつてもいゝ頃だらう。』

イリヤ。『ところが、彼奴は俺を罰しやがつた。』

ミルコ。『ナイフでかい。』

イリヤ。『ナイフでさ。而も俺の心臓を突刺した。

ミルコ。『左様ぢやアない。背後から刺したんぢやアないか。』

イリヤ。『心臓だ。心臓だ。俺はこの一年半の間、胸に受けた傷に、絶えず苦しむで來たのだ。』

ミルコ。『その傷つていふのは、異ふ意味なのだね。』

イリヤ。『さうだ。……目に見えない傷の事をいつてゐるのだ。去年彼奴が俺を突刺した後で……』(躊躇する。)

ミルコ。『さう〳〵、種々な噂が立たつけ。』

イリヤ。『その噂だ。……俺はその噂が事實ではないかと……』

ミルコ。(早口に)『ではあの晩、アダの奴が何かしたつていふのか。』

イリヤ。『彼奴は俺の心臓を突刺たのだ。』

ミルコ。『あの娘を連れていつたといふ事か。』

イリヤ。『左様だ。』

ミルコ。『只、それだけの事で別段何事もなかつたのぢやアないか。』

イリヤ。『俺が苦しむでゐるのは、そこなのだ。』

ミルコ。『そんな疑をもつてゐたのか。』

イリヤ。『俺は十八ヶ月、それで苦しむできた。』

ミルコ。『そんな馬鹿な事はない。何故あの娘に詰問して見ないんだ。』

イリヤ。『俺は幾度、あの娘を詰問しやうとしたか知れないが、どうしても、そんな事は出來なかつた。いつもあの娘の側へゆくと、肝心の云はふと思つてゐた言葉が咽喉につかへて了ふのだ。』

ミルコ。『そんな可笑しい事があるかね。』

イリヤ。『俺はあの晩の事を云はふとすると、顔ばかり熱つて來て、急に土の上で身が竦むでゐふのだ。』

ミルコ。『お前はあの娘に惚過ぎてゐるからだらう。』

イリヤ。(相手の顔をぢつと視詰ながら)『俺には分らない。あの娘は俺の顔を見ると首を垂れて了つて、何にも口をきかない。俺はあの娘が、今にも地の底へ沈むでゆきそうな樣子をしてゐるのを見ると俺も石のやうに堅くなつて了つて滿足に口もきけなくなる。』

ミルコ。『それはあの娘が、お前に惚れてゐるからさ。……夫をお前がそんなに氣を廻すなんて野暮の骨頂だ。』

イリヤ。『あの娘は慥に、耻辱の爲に死かゝつてゐるのだ。』

ミルコ。『では、確な證據でも握つてゐるのか。』

イリヤ。『別に證據はないが、只俺がそんな事を感ずるのだ。』

ミルコ。『根も葉もない事を、自分の想像で勝手に揑造して苦しむなんて、呆返つたものだ。』

イリヤ。『お前のいふ事は眞實かも知れない。……然し、その中には一種の快感がある。』

ミルコ。『何の中に?』

イリヤ。『こんな馬鹿氣た想像の中にさ。……俺は幾晩も〳〵眠れないほど苦しむでゐるが、この、ナイフで心臟を剝られてゐるやうな苦痛の中に、或る快感がある。俺の親父も、形式は違ふが矢張り、俺と同じやうに苦痛を樂むでゐる。』

ミルコ。『自分の許婚の男が、怪我をして倒れてゐるやうな場合に、どうしてあの娘にそんな大それた事が出來るものか。想像て見るがいゝ。』

沈默。

イリヤ。『女つてものは、自分の爲に男同志が頭を碎合ふのを好むものだ。』

ミルコ。『あんな僅な時間に、そんな事のありやう筈はないぢやァないか。』

イリヤ。『女つてものは、あんな風に暴力で擔いでゆかれたりするのを好むものだ。』

ミルコ。『好きな男にならさ。……』

イリヤ。『直ぐに捨られるのが、分つてゐても喜ぶものだ。』

ミルコ。『何だい、そんな狂人染た顔をして……ちつと氣を鎭めたらどうだね。』

イリヤ。『彼奴が、あの娘にナイフを突つけて、人喰鬼のやうに睨付けた殺那に受けた、恐怖のうちに……』

ミルコ。『何だつて……』

イリヤ。『恐怖に脅えて娘が顏をあげた時、娘の眼に映つた男の顏は、一生涯忘れられずに、娘の魂に灼付られてゐるだらう。』

ミルコ。『それがどうしたつていふのだ。』

イリヤ。『動物が鞭で打れると、如何にも優しい眼付をして憐を乞ふやうに、人間の顏を見上げるだらう。その瞬間から動物は、人間に對する愛を感ずるに違ない。それと同じやうに、少くもあの娘は恐怖の瞬間に彼奴を愛したに違ない。』

ミルコ。『まるで狂人だね。』

イリヤ。『そして夢中で……』

ミルコ。『最う止せ〳〵。』

イリヤ。『彼奴は、あの娘を力づくで、ものにすると云つてゐた。』

ミルコ。『餘程どうかしてゐるぞ。お前の常識はどこへいつた。』

イリヤ。『……誰も知ない。あの娘自身さへ氣を失つて了つて何も知ない……俺はあの晩の月を呪つてやる。あの娘が嫌だといふのに無理に連出して、とう〳〵あんな目に會せて了つた。あまり月がよかつたものだから……。』

ミルコ。『何だつて今まで默つてゐて、明日婚禮といふ間際になつてから、そんな詰らぬ事をいひだすのだ。恥を知れ、恥を知れ。』

イリヤ。『俺は今日まで自分を瞞着してゐたのだ。俺はどうかして忘れやうと思つて、無理に心の底に押つけておいたのが、とう〳〵一時に燃上つてきたのだ。』

ミルコ。『お前は自分で自分を、嫉妬の焰に投込むでゐるのだから、俺には、どうも手のつけやうがない。まア、ひとりで靜に考へる方が好らうから、俺はこれで歸る。』

ミルコ、立上る。イリヤ周章てゝ彼の腕をとる。

イリヤ。『最う鳥渡でいゝから、俺の話をきいてくれ。』

六場

メイラ、いそ〳〵と登場。

メイラ。『イリヤ、鳥渡。』

イリヤ。『何だい、お母さん。』

メイラ。『鳥渡、裏庭まで出ておいで。』

イリヤ。『何さ。』

メイラ。『お前の可愛い嫁御が、私に會ひに來たのだよ。あの娘は、あの奇麗な手でこしらへた、襯衣や、手巾を持つてきてくれたのだよ。だから私はあの娘の晴衣にする絹の布をやつたよ。……眞實にまア、何て優しい娘だらうね。……お前は幸運ものだよ。……さア鳥渡いつて會つておやり、どんなに喜ぶか知れないから。……あの娘は何だかお前の事を心配してゐるやうだから、鳥渡顏を見せておやりな。』

イリヤ。『お母さん、俺はまア、會はないでおかふ。』

メイラ。『どうしてさ。』

イリヤ。『俺は會はない。』

メイラ。『明日は婚禮だつていふのに、どうしたのだい。』

イリヤ。『俺は會ひたくないんだ。』

メイラ。『まア何ていふ子だらう。……この家の人達は、皆どうかして了つた。』（荒々しく戸をしめて出てゆく）

フト、窓外に騒しい人聲が起る。ドッと笑ふ聲に交つて、バヰオリンの音と、おどけた唄の聲が聞える。イリヤとミルコは窓から戸外を覗く。

七場

鳥の羽根を飾つた綠色の帽子を冠つて、長靴を穿いた、林務官のバシリビッチが、ソーセー

ジの繋いだのを頸にかけて、醉拂つて這入つてくる。山番のマティチ、バキオリン彈のジプシー、イラリヤ等が順々に續く。

山番、マティチ。『イラリヤの旦那、婚禮の御馳走は今晩から始りますかね。儂は斯ふいふ、いゝ客人をお連れ申した。』

イラリヤ。『ようこそおいでなすつた。』

マティチ。『林務官の旦那なつて中々百姓の家へなんか來るものぢやアない。それを儂がお供してきたのだ。』

イラリヤ。『どうも御苦勞〳〵。』

マティチ。『最初、旦那は、儂の家で一杯やられてな、それから出掛けてきたのさ。一つところで飲むだのぢやア、飲むだ氣がしないからなア。そこで儂が斯ふいつた。「旦那、如何ですイラリヤの家へお供致しませう、あすこでは明日倅の婚禮だといふので、酒や肴はお好次第。」すると旦那はよからうと仰つてな。ハッハハハ。』

その間、林務官のバシリビッチは腰に手をあてゝ室内を兎のやうに飛歩いてゐる。

マティチ。(イラリヤに對つて)『旦那御覽なさい。(林務官を指して)中々快活でゐらつしやるだらう。こゝへ來る途中、村役場の前を通りかゝると、この旦那は、いきなり石段に腰をかけて、見てゐる間に鼾をかいて睡ておしまひなすつた。』

イラリヤ。『林務官は大方昨夜、安眠されなかつたのだらう。』

マティチ。『旦那は大して安眠なさらなくてもいゝのだ。……この旦那は十人前位のお酒をひとりで召上つて了つて、一週間位靴を脱ない。』

イラリヤ。『村役場でお睡眠になつたのだらう。』

マティチ。『ねえ旦那、儂がこの客人を連れてきたのですから、ようございますか。肉と酒の上等を明日儂の家の臺所口へ忘れずに願ひますぜ。』

イラリヤ。『いゝとも承知だ、承知だ。』

林務官。(イラリヤの手をとつて)『イラリヤ君、儂はね、君の許のソーセーヂを、この通り失敬して了つたよ。許してくれ給へ。どうだい立派な首飾りだらう。』

マティチ、ミルコの前に進み出て、握手をする。

イラリヤ。『皆さんに何を御馳走しませう。』

林務官。『殘り物でも何でもいゝ、遠慮なく、みんな出し給へ。(といひながら腰に手をあてゝ部室の中を飛はねてゐるうちにミルコを見付けて)オヤ〳〵、君は誰だい……(イラリヤを見て)やア、君、今日は。』

イリヤ。『よくいらつしやいました。』

マテイチ。(ミルコを指して)『旦那、あれや學者でございます。』

イラリヤとイリヤは納戸へ酒肴をとりにゆく。

林務官。『さア、ジプシー君、始め給へ、始め給へ。』

ジプシーはバヰオリンをとつて賑かな舞踏曲を彈く。

林務官。『さア、マテイチもやれ。』踊りながら唄ふ。

唄、

踊れやジプシー、唄へやジプシー、
そんなに物を欲しがるな。

林務官。『さア、學者先生も來た。』

イラリヤとイリヤ、大きな皿に堆く盛つた燒肉及び酒、ビスケット等を運むでくる。

林務官。『イラリヤ君もイリヤ君もこゝへ來て踊り給へ。』

イラリヤ。(頭をかきながら)『儂は既う踊る年齢でもございませんて。』

林務官。『踊れや、踊れや』(飛跳てゐる)

イラリヤ。『儂はまア、御免蒙りませう。』

林務官。『君の伴の婚禮ぢやアないか。』

尙も踊りながら、唄ひつゞける。

唄、

神樣眞個によいお方、女子をくれたよいお方。

マテイチ。『イラリヤの旦那、林務官の旦那と踊つたら名譽ぢやアないか。早くいつてお相手をするがいゝ。』

イラリヤ。『どうも儂はそんな柄ぢやアない。』

マティチ。『そんな事いはないで、まア〳〵。』
ミルコ。『そんな無理强するものぢやアない。』
マティチ。『では、林務官の旦那が無理に踊れと仰つたら、どうする。』
ミルコ。『そんなことをいふ林務官は大馬鹿だ。』
マティチ。『大きなお世話だ』
イラリヤ、そつと部室をぬけ出す。
林務官。『儂はもう踊に飽きた。オヽ〳〵汗びつしよりだ。ジプシー止めた。』
林務官、マティチ、ジプシー等卓子の前に腰をかけて飲食を始める。林務官は大きな燒肉を手づかみで頰張つてゐる。
林務官。(マティチに對つて)『オイ、お前のいヽ咽喉を聞してくれ。』
マティチ咳拂ひをして唄ふ。
唄、
鳥の啼く、綠の森で、

私はひとりの、女子に會つた。
せゝらぐ水は、流をとゞめ
空飛ぶ雲も、止まれば、
私の足も、釘づけさ。

林務官。(拍手して)『お前はいつも面白い事をいつちやア、笑はせるな。ところで、いヽ女でもないものかね。』
マティチ。『どんな女でも、お好次第。』
林務官。『何處で會へるね。』
マティチ。『いつもの酒場でさ。』
林務官。『俺は今晩、青天井の下で、睡りたいのだ。』
マティチ。『お氣遣には及びません、寢臺を裏庭へ持出しまさア。それとも天幕を張りませうかね。』
林務官。『いや、露に打れて睡る方がいヽ。』

マテイチ。『如何様とも御意のまゝにといふところです。』

林務官。『そして翌朝は、ジプシーを寄越して貰はふ。』

マテイチ。『宜しうございます。儂がまづ味を見て、乙なところをお世話しませう。』

林務官。『エヽ？』

マテイチ。『冗談は冗談として、先づ風流なところをお目にかけます。』

林務官。『では石炭のやうな黒い眼と、眞珠のやうな美しい齒並の若い女を、二人な。』

マテイチ。『ジプシーといつても只のジプシーでなく、親方の娘で、女王のやうな奇麗なのをね。』

林務官。(兩手を擴げて)『可愛い奴ぢやゝ。』

マテイチ。『儂が若し金持だつたら、世界中の美人をあつめて進ぜますよ。旦那の御身分で何もそんなに不自由される事はない。』

林務官。(俄にメソ〳〵と泣出す)『あゝ儂ほど不運なものはない。この年齡になつて、不自由だらけだ。儂は疾うからアラビア馬が欲くて耐らなかつたが、まだ乘合馬車に乘つて歩いてゐる。』

ミルコ。(眉を顰めて呟く)『何といふ役人だ。』

林務官。『イリヤ、儂は空腹だ。』

イリヤ。『旦那の前にある肉を召上つたら、どうです。』

林務官。『儂は鳥の肉が食ひたい。』

マテイチ。『どんな鳥を御所望です。七面鳥の丸燒は如何ですね。この家のもの達は閣下がおいでになつてゐるといふのに、何をしてゐるのだ。』

イリヤ。『皆、裏で忙しく働いてゐるのですよ。』

林務官。『イリヤ、俺は七面鳥の丸燒が食度い。』

イリヤ。『ようございますとも。少しお待下さい。』(イリヤ退場)

マテイチ。『旦那、こゝの家ぢやァ婚禮で目出度がつてゐるのだから、何でも遠慮なく御注文なさい。』

林務官。『ヨウ〳〵ヨウ』(掛聲をしながらウキスキーを牀に撒布す。)

マテイチ。『お宅にゐらつしやる積りで、すき自由になさいまし。こゝの家の名譽でございます。』

イリヤ、室内に戻つてくる。

林務官。『儂は何處へいつても、自分の家にゐるやうな氣がしてゐる。』

イリヤ。『只今、七面鳥を殺しました。』

林務官。(腑に落ないやうな顏をして)『七面鳥だつて……儂は七面鳥といつたけな。事によつたら七面鳥といつたかも知ないが儂は、家鴨の事をいつてゐたんだ。儂は家鴨が何より好物だ。マティチ、儂は何ていつたつけ。』

マティイチ。『七面鳥とか、いひなすつた。けれども旦那は他事を考へてゐらしつたやうだつたから、つい七面鳥と仰つたのだらう。』

林務官。『イリヤ、お前は既う半人前の男ぢやアないか、儂の心が讀めそうなものだ。さア、早くいつた、家鴨だぜ。』

イリヤ躊躇する。

ミルコ。『イリヤ、止せ、馬鹿らしい。』

マティイチ。(ミルコに對つて)『いらないお世話だ。默つて引込むでゐろよ。』

林務官。『家鴨、家鴨。(といひながら表通りに面した硝子窓を叩いてゐるうちに過つて破壞す)ヨウ、ヨウ〳〵、こゝぢやア家まで浮れ上つてゐる。』

マティイチ。『心が踊れば手も踊る、ヨウ〳〵ヨウ。』

八　場

イラリヤ、再び登場。

イラリヤ。『これは〳〵大層な御機嫌で……。』

林務官。(裏庭に向つた窓ガラスを破壞しながら)『ホウ家が喜むでゐる。窓が喜むでゐる。』

ミルコ。『イリヤ、俺が手を借してやるから、この豚共を引摺出して了へ。』

下僕、部室の中へ驅込むでくる。

下僕。『こいつはいけねぇ、飛でもねぇ奴等だ。』

林務官。(ミルコに對つて)『さア、相撲なら來い。』

ミルコ、林務官と組打をする。イリヤと下僕、ミルコの加勢をして、林務官を戸口から突出して了ふ。

マテイチ。『何といふ亂暴な奴等だ。林務官閣下を追出すなんて、罰が當るぞ。』

マティチ、大聲をあげながら、林務官のあとを追ふ。ミルコ、イリヤ、下僕、ジプシーのバヰオリン彈き、それに續いて退場。

九場

取亂されたる部室に、只ひとり、イラリヤ茫然として立つてゐる。毀された硝子窓のそばに歩み寄る。

イラリヤ。『斯ういふ連中にかゝつちやア耐らない。仕樣のない奴等だ。だが假令、どんな事があらうとも、客人を叩き出すなんて以ての外だ。あとで林務官の許へ謝罪にいつて來なくてはならない。』

この時、アダ忍び足にて入來る。

十場

アダ。(靜に)『イラリヤ小父さん。』(背後から呼びかける)。

イラリヤ、ギョッとして後方を振返る。

イラリヤ。『アダ、お前か。』

アダ。『親父が仲直りするんだつていふから、來たんだ。皆に宜しくといつてゐた。』

イラリヤ感激に震える手を伸して、アダと握手をする。

アダ。『親父が今迄の事は、悉皆、忘れて貰ひたいといつた。』

イラリヤ。『いゝとも、いゝとも。グサは男だ、俺は以前からグサの人物を知つてゐたのだ。』

アダ。『夫から、あの畑はもと〳〵親父のものに違ひないが、兎に角有難く頂載するといつてゐた。』

イラリヤ。『もと〳〵親父のものだつて、(思返したやうに)あゝ、さうだ、さうだ。』

アダ。『あの畑には親父の魂が打込むであるから、それで親父のものだといふんだ。』

イラリヤ。『それでよく解つた。』

アダ。『親父は明日の婚禮に來るといつたよ。』

イラリヤ。『グサがきてくれるつて、アダや、眞實かい。』(アダの額に接吻する。)

アダ。『親父は俺に斯ふいつた。お前は、平和と歡喜の使者になれ。明日婚禮の式が濟むで、イラリヤが有頂天になつてゐる最中に、俺がいつて、イラリヤの幸福の爲に乾杯してやる……。』

イラリヤ。(感極つて大聲に悴を呼ぶ)『イリヤ、イリヤ。』

十一場

イリヤ登場。

イラリヤ。『さアお前達、抱合つて接吻をしろ。』

アダ、とイリヤ默々として握手をする。

アダ。『お互に過去つた事は悉皆忘れて了はう。』

イラリヤ。『神樣の御惠だ、有難い、有難い。イリヤ、お前の付添人は、きまつてゐるのか。極つてゐたら斷つて了つて、アダを賴むがいゝ。』

イリヤ、迂散臭さうに、ぢつとアダの樣子を見る。イラリヤ、奥の戸口から大聲に下僕を呼ぶ。

イラリヤ。『オイ、アンドリヤ、鳥渡來い。』

十二場

下僕登場。

下僕。『旦那樣、お召でございますか。』

イラリヤ。『アンドリヤ、すぐ村中へ布令を出せ、最う五十人か百人お客を招ぶのだ。』

下僕呆れた顔をして。

下僕。『一體誰をそんなに招ぶのです。』

イラリヤ。『誰でも構はない道路で會つたものは、誰でも呼むで來い。いや、そんな事ぢやアいけない。方々の辻々に立つて、大聲で、「明日はイラリヤの家の婚禮だから、どなたも皆いらしつて下さい」といふのだ。すぐ行つてこい。』

下僕、退場。

イラリヤ。(裏庭に面する窓から、戸外を覗いて)『皆の衆。もつと、どし〳〵牛や豚や羊を屠殺してくれ。大變なお客樣なのだから。メイラは何處へいつたんだらう。早くいつて喜ばしてやらなくちやア。』

イラリヤ、いそ〳〵と部室を出てゆく。沈然、暫時續く。

イリヤ。『オイ、アダ。』

アダ。『俺はお前の親父が好だ。』

イリヤ。『俺の親父は誰でも愛すのだ。そして何よりも一番生命を愛してゐる。さア、アダ、一緒に一杯飲まう。』

イリヤ、二つのカツプに酒を注ぎ、乾杯する。

アダ。『お前と一緒に斯ふして酒を飲むなんて、何だか變な氣持がするな。』

イリヤ。『アダ聽いてくれ。俺の親父は壽命を縮める程苦しむだ揚句、やう〳〵今日の喜びに達したのだ。親父は何も彼も自分の掌中に握つてゐたが、今ではまるで聖人のやうになつて、最後の肌衣まで、他人にやらうとしてゐるのだ。親父の歡喜は俺の胸の中まで、流込むできた。アダ、お前は明日の婚禮に俺の附添人になつてくれないか。』

アダ。『なるとも。』

イリヤ。『屹度かい。』

アダ。『屹度だ。』

イリヤ。『ぢやア、お前の親父が、俺の親父から贈物を受取つたやうに、お前も俺から、畑を一反貰つてくれないか。』

アダ。(喫驚して立上る)『畑を一反だつて?』

イリヤ。『ぢやア二反とつてくれ。』

アダ。『夫や！どういう味意なのだ。』

イリヤ。『その代り、俺はお前から……。』

アダ。『何をとるんだ。』

イリヤ。『お前の血を三滴。』

アダ、ぢつとイリヤを視据える。

イリヤ。(嗄聲で叫ぶ)『血だ、血だ……、お前はいつかの晩、俺達が踊つてゐる最中に、衆人の中で俺を突刺して耻辱を與へたぢやァないか。俺は決してそれを復讐するといふのぢやァない。狂言をやらうといふのだ。明日俺は二十人のジプシーに、バヰオリンを彈せて、村中の若い者達と一緒に踊るのだ。その時俺はお前の手をとつて眞中へ進み出て、お前の胸に、小さな銀のナイフを突刺して、たつた三滴、血を流すのだ。(イリヤ、懷中からナイフを出して見せ、またもとへ收める。)だが決して怪俄などはさせない。ホンの擦傷だ、……それから俺達は兄弟のやうに接吻をして、村の連中を呼と云せてやらう。さァ俺達は最う一度友達として握手しやう。』

アダ、後退りをしながら、不承不承に手を差出して握手する。

イリヤ。『承知してくれるか。』

アダ。『ウム。』

イリヤ。『アダ、どうしたのだ。顏色が惡いぢやァないか。』

アダ。『俺があの晩、お前の女を擔いでいつて、胸にナイフを突つけたら、あの女は口をあいたけれども、聲が出なかつた。俺はあの女を、丸太のやうに引抱へていつた。女はまるで死むだやうになつてゐた。そして俺の腕のなかで、蠟燭のやうに溶けてゆきそうだつた。(イリヤ段々靑くなつて、顏に苦悶の色を濃くしてゆく)あの女は幾度も救助を求めやうとしたが恐怖の爲に啞になつてゐた。俺はあの女が、俺の腕のなかで慄えてゐるのを見て、笑ひながら額に接吻してやつた。エヽ？イリヤ許容してくれるか。』

イリヤ。(唇を嚙ながら)『許容してやる。』

アダ。(冷な笑を浮べ乍ら)『夫から俺は、一寸先も見えない樣な、納屋の中へ連込むだのだ。お前の大事なあの女は、氣を喪つてゐたから。何にも知らない。それでも許容してくれるか。』

イリヤ頭を低く垂れ、空虛な目で、牀を視詰めてゐる。

イリヤ。(首をあげて)『アダ、お前は眞實の事を、いつてゐるのか。』

アダ。『俺の爲た事は、俺が一番よく知つてゐる。』

十三場

イリヤの許婚、ルヤ馳込むでくる。

ルヤ。(狂人のやうに)『嘘です、嘘です、そんな事は嘘です。』

アダ、ドキリとして青くなる。イリヤは耐へきれぬ重荷を下したやうな樣子で、ルヤの顏を見る。

ルヤ。『イリヤ、そんな事は、悉皆嘘です。』

イリヤ。(淋しい微笑を浮べて)『ぢやアお前は明日、立派に祭壇の前に立てゐるのかい。』

ルヤ。(欷歔しながら、イリヤの頸に腕をかけて)『どうか私を信じて下さい。何も彼も神樣が御存

知です。』

イリヤ。(アダの顏を睨付ながら)『アダ、さア、ルヤの前で、最う一ぺん云つて見ろ。』

アダ、顏を歪めて無理に笑ふ。

ルヤ。『私がこの惡人に擾はれていつた時は、恐ろしさに聲も出なかつたのですが、氣を喪つた、などゝいふのは眞赤な嘘です。私はこの惡人にナイフで心臟を突刺れるものと、覺悟してをりました。けれども納屋へ連込れた時は、生命がけで、闘はふと決心したのです。そして私に抱付ふとしたとき、私は全身の心を籠めて胸を突飛してやりました。その次にかゝつてきた時には、力まかせに鼻梁を叩いてやりました。(アダに對つて)あれから二三日、お前の顏は、紫色に腫上つてゐたぢやアないか。(イリヤに對つて)するとこの野獸は、狼やうに唸りながらナイフをもつて、飛かゝつてきたから、私はいきなり手首を叩いてやりました。(アダに對つて)さうしたらお前は、大切なナイフを藁の中へ落したぢやアないか。お前は一寸先も見えない闇だといつたけれどもお月樣が納屋一ぱいに、照してゐたぢやアないか。お前が藁の上を、四つ這になつて遺失したナイフを探してゐる隙を狙

つて、灰をお前の顔に叩付けて逃げてきたのぢやアないか。この意氣地なし。嘘つき。』

十四場

メイラ、登場。

メイラ。『私は方々探してゐたのだよ。さうしたら、御覽、私の小さな鳩は、もう、ちやんとイリヤのところへ、飛できてゐるのだもの。まア、どうしたのだい。何を泣てゐるの。(アダの姿を見付けて)何だい、この惡魔は、出ていつておくれ。すぐ出ていつておくれ。』

アダ、ムッとした樣子で、足音荒く室外に去る。イリヤとルヤ、手を取合ひて泣く。メイラ、優しく二人の肩を撫でる。

メイラ。『最う、何にも心配する事はない。それでいゝ、それでいゝ。』

――幕――

第四幕

イラリヤ、サリイチの庭内、枝を張つた、樹々の繁みを通して、美しい秋の日光が、地上に丸い影を落してゐる。樹陰には純白な布をかけた大卓子が、幾つもおいてある。數人の農夫等は、大皿や、木鉢に、盛つた料理を運むでゐる。後方の炊事場からは、賑かな笑聲に交つて、ナイフ、ホーク、皿などの、かち合ふ音が聞えてくる。舞臺左手に門と、庭に續く徑とが、見えてゐる。

一場

近所の農夫の妻が二人、食卓の上に花を飾つてゐる。

女の一。『嫁御は、澤山着物を持つて、おいでなさる、さうだ。』

女の二。『二年も以前から、紡いだり、織つたりしておいでなすつたから、さぞ澤山持つておいで

なさる事だらう。』

女の一。『麻の着物だけでも十五枚あるとさ。』

女の二。『大したものだね。』

女の一。『夫から絹の着物が三枚で、その中の一枚は金絲で、刺繍がしてあるんだとさ。』

女の二。『さうかい。嘸立派だらうね。』

女の一。『夫から麻の布が十反、木綿が十反。』

女の二。『そんなに澤山かい。』

女の一。『それにハンケチなんかは、白いのも、色のついたのも、數へきれない程だとさ。』

女の二。『ぢやア、金貨も澤山持つておいでなさるだらう。』

女の一。『金貨を三十枚だとさ。』

女の二。『まア〳〵、そんなにかい。お金持はいゝね。』

二場

メイラ、登場。

メイラ。『いそいでやつておくれ。最うぢきに、一同教會から歸つてくるから。お前達の子息が婚禮する時には、私が手傳にいつてあげるよ。』

女の一。『御心配なさいますな。間に合ふやうに致しますよ。』

メイラ。『私はもう餘り忙しくつて、どこから手をつけていゝか、さつぱり分らないのだよ。』

女の二。『さうでございませうとも、こんなに澤山お客をなさるのですからね。』

メイラ。(炊事場に聲をかける)『肉が燒過ぎないやうに氣をつけておくれ。』

炊事場の中から男の聲。『燒加減は上等です。』

三場

合財袋を背に負つた女乞食が、はいつてくる。

女乞食。『皆様の御心に幸が宿りますやうに……奥様何卒御恵を……』

メイラ。(食卓から肉の一片と、パンを取つて與へる)『今日はこれで十人目だよ……だが誰でもくれば空手では歸さないから、仲間を悉皆お寄越し。』

女乞食。(貰ひものを合財袋に入れる)『お宅の畑がよく、みのりますやうに、御一家が榮えますやうに……』

メイラ。『私は長生をするだらうかね。』

女乞食。『百年もお生なさいませう。』

メイラ。『では、うちの人は?』

女乞食。『奥様より一年と一日だけ、長生をなさいませう。』

メイラ。『さうかい……』

女乞食。『奥様、おありがとうございました。』(退場)

女の一。(メイラに對つて)貴女が、仲間を寄越せと仰つたから、御覽なさい、既うやつてきましたよ。』

四場

小娘が盲人の袖をひいて這入つてくる。盲人はバヰオリンを抱えて、愁しい曲を彈いて居る。

盲人唄ふ。

唄

月美しと人はいへど、
日は輝くと人はいへど、
我等は永久に闇をさまよふ。

メイラ。『まア何て悲しい歌だらう……(農夫の妻に對つて)お前達、何か袋に入れてやつてくれ。』

盲人ほどこしものを貰ふと歌を唄ひながら立去る。

輝く月は見えずとも、
照る日の影は見えずとも、
神よ、御顔を見せ給へ。

メイラ。『あの聲をきいてゐると、氣が滅入つて了ふ。』(退場)

女の一。『眞實に、これが世の中だね。婚禮だといつて、唄つてゐるものもあれば、あゝして泣てゐるものもある。』

女の二。『世の中はつらいものだね。』

五場

遠から晴やかな歌が聞えてくる。續いて腕を組合せた村の男の子と、女の子達が、歌ひながら列をつくつてくる。

唄

山の蔭から、谷間から。
綠の樹から、露が降る。
眞珠の様な、露が降る。

一同、門の前に止つて、互に樂しげに、さゞめき合ふ。

女の子の聲。『いつ舞踏が始まるのでせう。』

女の子の聲。『まだ笛吹が來てゐないわ。』

女の一。『最うぢき、笛吹がくるよ。』

メイラ。(門まで出迎へる)『よく來たね。さア、お這入り。(一同庭に入る)皆は何がいゝの、葡萄酒? それともウキスキー?』

男の子一。『小母さん、僕は葡萄酒がいゝ。』

男の子二。『僕はウキスキーがいゝ。』

メイラ。(女の子達に對つて)『お前達は何がいゝの。』

女の子一同。『お菓子を頂戴。』

メイラ。(微笑ながら)『眞實に可愛いゝ、子供達だね。』

メイラ炊事場へはいる。間もなく三人の女がウキスキー、葡萄酒、菓子などを持つてくる。

メイラまた戻つてきて、一同に菓子や葡萄酒を與へる。

男の子一。(相手の娘に對つて)『僕の可愛いゝ、お轉婆さん。』

女の子一。『私の好な餓鬼大將。』(互に手を取合つて快活に笑ふ)

男の子二。(相手の娘に對つて)『僕はお前を喰べちまうよ。』

女の子二。『喰べて貰ふより、一緒に踊る方がいゝわ。』

六　場

客の一行が到着する。主人のイラリヤと、盛裝した花聟のイリヤを光導に、鳥の羽根を帽子に飾つた正客のピータ。角笛をもつたタンヤ。牧師、ミルコ、林務官、山番マティチ、公證人その他多くの客人等這入つてくる。笛吹は直に賑かな笛を吹き初める。客のあるものは踊の列を作り、その他の人々は樹蔭の食卓について飲食を初める。

メイラ。(イリヤを抱いて)『イリヤ……私の寶のイリヤ、お母さんの心は、踊つてゐるよ。』

牧師。(メイラと握手をして)『神様の祝福が御家族の上に、溢れてをります。』

メイラ。『神様の祝福があなた様の上にも、溢れますやうに。』

牧師。『今日は子息さんの婚禮の式を司りましたが、明年はお孫さんの洗禮をさせて、頂きたいものです。』

タンヤとピータ踊りながら、近づいてきて、メイラの手をとる。

ピータ。『さア、小母さん、一緒に踊らふ。』

タンヤ。(踊のかけ聲をする)『ヨウ〳〵、ヨウ』

林務官。(立上る)『諸君、どうです、イラリヤ一家の爲に乾杯しやうぢアないか。尤も此家の子息

は昨日、儂を戸外へ撮出したが……まア然し、今日は斯ふして歡迎してくれたから、それでトン〳〵にしておかふ。諸君。儂はイラリヤ君を尊敬してゐる。彼は森の如くに偉大で、且つ剛腹な人物である。(イラリヤに對ひ)『イラリヤ君、君の子息は妻をめとつて、今日から一人前の男となつた。その上君は、澤山の畑を所有てゐる。葡萄畑も、牧場も、所有てゐる。即ち君は大地主である。そして多くの雇人を使用つてゐる。どうだい、君の子息を一生百姓に終らせないで、紳士にする氣はないかね。』

イラリヤ。『そんな事は神樣の御意に叶ひますまい。』

林務官。『君は自分の子息が、鳥の羽根のついた綠色の帽子を被つて、膝のところまである長靴を穿いて、銃獵に出掛ける姿を見たくはないかね。そして村の娘達が鶴のやうに頸を長くして、君の子息の姿に見惚れる樣子を見たくはないかね。』

イラリヤ。『悴が何と申しますか、おきゝ願ひませう。』

イリヤ。『俺には百姓靴を穿いて、鍬を擔いだ樣子が一番似合つてゐる。そして俺は、誰にも頸なんか延して貰ひたくないよ。勝手に森の中を、ブラつく方が、餘程いゝ。』

イラリヤ。『よくいつた、イリヤ、流石、俺の子息だ。』

ミルコ。(立上る)『イリヤ、よくいつた。俺はこの一家の健康を祝す。凡そこの一家ほど、平和と歡喜に滿ちた家はない。イラリヤ小父さん、俺は決してお世辭をいふのではないが、小父さんは數へきれぬ程の富を持ちながら、決してそれを誇らうとはしない。却つて土に頭を垂れてゐる麥の穗のやうに謙遜で、春の土のやうに親切だ、……俺は最う止める。こんな事をいくらいつても、際限がない。兎に角、俺は、樫の木の樣な小父さんを尊敬してゐる。そこでこの大木と凡の枝葉の爲に、乾杯する。……イラリヤ、サリイチ家萬歲!』

一同。『萬歲!』

イラリヤ。(一同に對つて頭を下げる)『どうも皆さん、有難ふ存じます。』

牧師。(立上る)『私はサリイチ一家の幸福に就きまして、一言申上げたいと思ひます。』

林務官。(牧師の袖をひいて、無理に座らせる。)『まア〳〵お座りなさい。牧師さんのお話といふものは、兎角抹香臭くつて、切角の酒の味が惡くなるものだ。』

マテイチ。(牧師の口に、杯を押つけて)『まア、それよりも、一杯おやんなさい。』

牧師。『……ではごく簡單に……』

林務官。『お止なすつた方がいゝ、又死後の世界たの、地獄だの、極樂だのつて話を初めると切角空つてゐる腹を何にも食はないうちに一杯にされて了つて、迷惑だからな。』

マテイチ。『燒肉の大ぎれでも口に押込むでお置きなすつた方がましだ。』

客の一。『どうしたんだらう、皆鳥渡も陽氣にならないな。』

客の二。『どれもこれも、いやに陰氣臭い顏付をしてゐるぜ。』

客の一。『第一主人公が浮ない顏をしてしてゐるぢやアないか。教會にゐた時も、何か考へ事をしてゐて、茫乎してゐたつけ。』

客の二。『さういへば花聟も顏色が悪い。』

メイラ、ピータ、タンヤ、舞踏の列から抜けてくる。

メイラ。『私たら、何て意氣地がないのだらう。あれつぱかり踊つて、既うお酒でも飲むだやうに目が眩つてさ……あれはいつだつたらう……さう〳〵、二拾年も以前だよ。……だから丁度二拾年振りで踊つたのだものね。葡萄酒でも飲まふかね。』

客の一人、葡萄酒を注いだカップを渡す。メイラそれを取つて一息に飲乾す。

メイラ。『皆の衆、何だつてそんなに靜にしておいでなの、まるでお葬式にでも來たやうな顏をして……どうしたの。』

七　場

泥土に塗れた仕事着をつけた農夫が、皮袋を背負つて這入つてくる。

農夫。『旦那樣、儂は山の畑から參りました。』

イラリヤ。『どうした。何か變つた事でもあつたかね。』

農夫。『牛が兒を生みました。』

客の一。『ホウ、それは〳〵、婚禮の日に、大層いゝ徵だ。』

農夫。『旦那樣、牛が雙生兒を生みましたですよ。』

人々の聲。(卓子より起る)『それや目出度い、それや目出度い。』

客の二。『牝牛が牡牛かね。』

農夫。『二匹とも牡牛でございます。』

人々の聲。『畑を耕す、牡牛が二匹だとよ。』

客の一。『イラリヤ父ッサンは、一向喜ぶ様子もないね。』

メイラ。(食卓について)『さア座つて一杯お飲み、遠いところを御苦勞だつたね。』(農夫に酒を注いでやる。)

農夫。『夫から奥様、昨日蜜蜂が一時間計りのうちに、三組も巣を立つてゆきましたです。』

人々の聲。『夫は珍らしい。』

農夫。『夫から儂は一時間計り森の中を追かけて歩いてゐると、とう〳〵三組とも樫の木に止りました。まるで三つの小さなお天道様のやうで、誠に見事でございましたよ。』

メイラ。『まア、さうかい。』

農夫。『儂はすぐ家へ歸つて、巣箱を持つてゆき、三組の蜜蜂を無事に入れてきましたです。』

メイラ。『それはどうも御苦勞だつたね。』

農夫。『どうも御馳走様で、ゐらい御邪魔を致しました。』(退場)

ピータ。『イラリヤ父ッサン、どうかしたかね、ひどく元氣がないぢやアないか。

イラリヤ。『俺は花嫁のくる時まで、喜を胸に溜めてゐるのさ。』

タンヤ。『それに花聟殿のイリヤまで、まるで雨雲のやうに、陰氣くさい顏をしてゐるぢやアないか。』

イリヤ。『俺は何だか、まだ眞實に自分の家へ歸つたやうな氣がしない。』

沈默。

タンヤ。『ぢやア何處にゐるやうな、氣がするのだね。』

イリヤ。『俺は死骸が教會へ運込れるのを傍で見てゐるやうな……。』

客一同。(驚愕いたやうに立上つて顏を見合せる)『エッ? 死骸だつて。』

メイラ。(顏色を變つて)『さア皆さん、早く花嫁を迎ひにいつておくれ。』

ピータ。『だが、まだ時間が早過ぎるぢやアないか。夕方にもならないのに、花嫁を迎ひにゆくなんて、習慣にはづれてゐる……』

盲人の悲しい唄が街道の方から聞えてくる。

唄

月美しと人はいへど
日は輝くと人はいへど
我等は永久に闇をさまよふ。

メイラ。『さァ皆さん、食卓をひつくり返しても、皿を破壊しても構はないから、陽氣に騒いでおくれ。』

盲人また庭に這入つてきて唄ふ。

輝く月は見えずとも、
照る日の影は見えずとも、
神よ。御顏を見せ給へ。

突然、街道に騒しい人聲が起る。人々卓子を離れて表へ走りゆく。暫時の間、舞臺には盲人と小娘だけ殘る。

八　場

二人の醉漢が蹌踉ながら這入つてくる。

盲人と小娘恐怖の態にて立去る。

醉漢一。『駄目だといつたら……俺の足が云ふ事をきかねえぢやァないか。』

醉漢二。『ところが俺の足が、いふ事をきかせやうつていふんだ。』

醉漢一。『この家の主人公は、まづい面をしてゐるが、肉が旨えから、いゝとしておかふ。』

醉漢二。『酒も旨えな……』

醉漢一。『お前は何升飲むだ。』

露光量違いの為重複撮影

醉漢二。『さうさなア……三升も飲むだか。』
醉漢一。『夫にしちやア、しつかりしたもんだな。』
醉漢二。『しつかりしてゐるとは何のこつた。手前は俺に喧嘩を吹掛けるのか。』
醉漢一。『さうよ……それがどうしたんだ。』
醉漢二。『喧嘩ならこい。』
醉漢一。『手前はな、俺の葡萄酒の中へ、ウキスキーを入れたらう。』
醉漢二。『いつ入れた。えッ、いつ入れた。』
醉漢一。『手前がウキスキーを入れないで、どうして俺が、こんなに醉ふものか。』
醉漢二。『この野郎、巫山戯た事をいやがる。さア來い。その太い首玉を引抜いてくれるから。この嫉妬男め。』
醉漢一。『そんな不思議な面をしやがつて、俺が恐怖がると思つてゐるのか。骸骨奴。』
二人は暫時上になり、下になり取組合ふ。醉漢の一は遂に相手を組伏せて、顏を散々に撲つ、醉漢の二、悲鳴をあげて救助を求める。

九場

下僕及び二人の客、馳つける。
下僕。『呆れたものだ。人の婚禮に招れてきて、この醜態はどうだい。』
客の一。『この耻知らず。』
客の二。『何處か空いた部室へ、抛込むでおいたらよからう。』
下僕。『そんな事をしちやア、奥樣に叱られる。』
客の一。『それといつて、こんな呑だくれを、こゝに置ちやア、何を仕出來すか知れやしない。』
二人の醉漢、地上に轉つたまゝ、眠り初める。
客の二。『仕方がない奴等だ。今度は睡てしまつたぜ。』
下僕。『ぢやア毛布にくるむで、納屋へでも叩込むで、好きなだけ、寢かすとしやう。』
下僕、毛布を持つてくる。二人の客は毛布の上に醉漢等を轉し込み、下僕と三人で奥へ擔い

露光量違いの為重複撮影

醉漢二。『さうさなァ……三升も飲むだか。』
醉漢一。『夫にしちやァ、しつかりしたもんだな。』
醉漢二。『しつかりしてゐるとは何のこつた。手前は俺に喧嘩を吹掛けるのか。』
醉漢一。『さうよ……それがどうしたんだ。』
醉漢二。『喧嘩ならこい。』
醉漢一。『手前はな、俺の葡萄酒の中へ、ウヰスキーを入れたらう。』
醉漢二。『いつ入れた。えッ、いつ入れた。』
醉漢一。『手前がウヰスキーを入れないで、どうして俺が、こんなに醉ふものか。』
醉漢二。『この野郎、巫山戯た事をいやがる。さァ來い。その太い首玉を引拔いてくれるから。この嫉妬男め。』
醉漢一。『そんな不思議な面をしやがつて、俺が恐怖がると思つてゐるのか。骸骨奴。』
二人は暫時上になり、下になり取組合ふ。醉漢の一は遂に相手を組伏せて、顏を散々に撲つ、醉漢の二、悲鳴をあげて救助を求める。

九場

下僕及び二人の客、馳つける。
下僕。『呆れたものだ。人の婚禮に招れてきて、この醜態はどうだい。』
客の一。『この耻知らず。』
客の二。『何處か空いた部室へ、抛込むでおいたらよからう。』
下僕。『そんな事をしちやァ、奥樣に叱られる。』
客の一。『それといつて、こんな呑だくれを、こゝに置ちやァ、何を仕出來すか知れやしない。』
二人の醉漢、地上に轉つたまゝ、眠り初める。
客の二。『仕方がない奴等だ。今度は睡てしまつたぜ。』
下僕。『ちやァ毛布にくるむで、納屋へでも叩込むで、好きなだけ、寢かすとしやう。』
下僕、毛布を持つてくる。二人の客は毛布の上に醉漢等を轉し込み、下僕と三人で奥へ擔い

露光量違いの為重複撮影

でゆく。

十場

人々の笑聲、角笛の音、馬車の響等が、入亂れて聞えてくる。やがて大勢の客が入つてくる。村の男の子や、女の子は門の兩側に立並むで、花聟、花嫁を迎へる。金絲の刺繍をした純白な晴着を纏つた、花嫁ルヤは、花聟イリヤに手をひかれて、入つてくる。女の子達は一齊に美しい花を投げかける。イラリヤとメイラは入口に立つてゐる。ルヤはメイラの持つてきた枕を跨いで兩人の手に接吻する。メイラは嬉泣をしながら、ルヤの手をとつて、母屋の方へ導く。

女の子一。『隨分きれいね。』

女の子二。『當然だわ、ルヤさんは、村一番の美人ぢやァありませんか。』

女の子一。『けれども顏の色が少し惡いわね。』

女の子二。『屹度、恥しいからよ。』

女の子一。『恥しければ赤くなる筈だわ。』

花嫁、花聟、イラリヤ、メイラ互に腕を組むで、庭にいで中央の食卓に着席する。新に料理が運込まれる。ジプシーの音樂隊がドヤ〳〵入つてきて、一番奥の炊事場に近い卓子につく。

一同拍手して迎へる。

メイラ。『皆さん、何卒、澤山召上つて、澤山飲むで、賑かに唄つたり、踊つたりして下さい。ジプシー、どうして始めないのだい。早く陽氣なものをやつておくれ。』

イラリヤ。(立上つて)『鳥渡待つた……まだ時間が來ない。』

メイラ。『まア、貴郎はどうしたのです。この通り美しい、可愛いゝ花嫁がきてゐるのに……さアジプシー構はず始めてよろしいよ。』

イラリヤ。(ジプシーに手眞似をして止させる)『嫁は溫順しい性分だから、そんな騷しい事は好ないい。』

メイラ。(ルヤに對つて)『私の可愛い、小鳥や、お前はジプシーの樂隊は厭いなの?』

ルヤ。『いゝえ、私にお構ひなさらないで、何でも父様や、母様のお好きなやうになすつて頂戴。』

露光量違いの為重複撮影

でゆく。

十　場

人々の笑声、角笛の音、馬車の響等が、入亂れて聞えてくる。やがて大勢の客が入つてくる。村の男の子や、女の子は門の兩側に立並むで、花聟、花嫁を迎へる。金絲の刺繍をした純白な晴着をまつた、花嫁ルヤは、花聟イリヤに手をひかれて、入つてくる。女の子達は一齊に美しい花を投げかける。イラリヤとメイラは入口に立つてゐる。ルヤはメイラの持つてきた枕を跨いで兩人の手に接吻する。メイラは嬉泣をしながら、ルヤの手をとつて、母屋の方へ導く。

女の子一。『隨分きれいね。』

女の子二。『當然だわ、ルヤさんは、村一番の美人ぢやァありませんか。』

女の子一。『けれども顏の色が少し惡いわね。』

女の子二。『屹度、恥しいからよ。』

女の子一。『恥しければ赤くなる筈だわ。』

花嫁、花聟、イラリヤ、メイラ互に腕を組むで、庭にいで中央の食卓に着席する。新に料理が運込まれる。ジプシーの音樂隊がドヤ〳〵入つてきて、一番奥の炊事場に近い卓子につく。一同拍手して迎へる。

メイラ。『皆さん、何卒、澤山召上つて、澤山飲むで、賑かに唄つたり、踊つたりして下さい。ジプシー、どうして始めないのだい。早く陽氣なものをやつておくれ。』

イラリヤ。(立上つて)『鳥渡待つた……まだ時間が來ない。』

メイラ。『まア、貴郎はどうしたのです。この通り美しい、可愛いゝ花嫁がきてゐるのに……さアジプシー構はず始めてよろしいよ。』

イラリヤ。(ジプシーに手眞似をして止させる)『嫁は溫順しい性分だから、そんな騒しい事は好ないい。』

メイラ。(ルヤに對つて)『私の可愛い、小鳥や、お前はジプシーの樂隊は厭いなの?』

ルヤ。『いゝえ、私にお構ひなさらないで、何でも父様や、母様のお好きなやうになすつて頂戴。』

イラリヤ。『何事も度を過さぬが肝要だ。神様は人間の慢心するのをお喜びなさらぬ。』

イリヤ。『お父さん。』

イラリヤ。『何だ。』

イリヤ。(父親の顔をぢつと視詰なから)。いくら待つても、グサは來ないよ。』

イラリヤ。(周章て)『でも、アダが來るといつたぢやアないか。』

イリヤ。『あの悪黨がくるものか。』

イラリヤ。『どうして、そんな事が分る。』

イリヤ。『俺にはちやんと分つてゐる。』

ルヤ顔ゐ染めて、そつとイリヤの袖をひく、イリヤ、ルヤを見返して口を噤む。イラリヤ空虚な笑をして、一同に頭を下げる。

客の一。『これやいけない。イラリヤ父ッサンが、どうかした。』

人々の聲。『ひどく加減でも悪いのぢやアないか、あんなに眞青になつてゐる。』

あたりが急にざわめいてくる。

イラリヤ。(嗄聲で)『皆の衆、どうぞ聞いて下さい。』

人々の聲。『叱！　叱！』

イラリヤ。『我々か斯ふして歡樂に耽つてゐるのも束の間だ。』

客の二。(獨言のやうに)『何をいつてゐるのだらう。』

イラリヤ。『一寸先には、どんな暗い運命が横つてゐるか、誰も知ない。』

客の三。(獨言のやうに)『何の事だらう。』

イラリヤ。『やがては、我々の井戸の水は乾き、畑や葡萄畑は枯れて了ふ。』

客の四。『イラリヤは豫言をしてゐるんだ。』

イラリヤ。『空には黑雲が漲り、地には火焔と洪水が溢れて生きたものも、死むだものも悉く、地獄へ墮るのだ。』

客の一。『イラリヤ父ッサンは、悪魔に憑れたんだ。』

牧師。『神の默示を語つてゐるのだ。』

林務官。『先づ嚴法つて、ところか。』

露光量違いの為重複撮影

イラリヤ。『地は地獄の呻を發し、天は稻妻と雷鳴をもつてそれを迎へるのだ。』

牧師。『神の御名を讃たゝへよ。イラリヤは豫言者になつた。』

客の一。『氣が違つたのだ。氣が狂つたのだ。』

イラリヤ。『俺は神と惡魔の鬪を見てゐるのだ。』

遠くから蹄の音を響かせて、馬に乘つたグサと、アダが門前に現はれる。

人々の聲。『やア來た、來た。』

客の二。『グサが來た。』

客の一。『惡魔が來た。』

十一場

グサとアダ馬より下りて庭へ這入つてくる。イラリヤ急に顏色を輝かして、いそ〳〵と出迎へる。

イラリヤ。『よく來てくれた。(一同に對つて)さアこれからだ。婚禮の祝はこれからだ。(ジプシーに合圖をして)始めた、陽氣にやつてくれ。』

熱情をそゝるやうな激しい奏樂が起る。イラリヤ力强く、グサの手を握る。グサはすぐ手を引込る。

グサ。『どうだ、約束を守つて來たらう。』

イラリヤ。『眞實によく來てくれた。どうか俺と一緒に喜むでくれ。』

グサ。『俺のやうな腹黑い奴でも約束だけは守るのだ。フン。』

イラリヤ。『オイ、ピータ、タンヤ、もつと酒を持つて來させないか。』

グサ。『イラリヤ、俺がいつか畑で「グサが他人に頭を下げるのは、一生に一遍だ」といつた事を記憶えてゐるだらう。』

イラリヤ。(グサの言葉を氣にもとめないで)『さア〳〵、こつちへ、一番上席がいゝ。あゝそれより俺の席に座つて貰はふ。』

グサ。『俺はお前の家の婚禮に來たが……。』

露光量違いの為重複撮影

イラリヤ。『地は地獄の呻を發し、天は稻妻と雷鳴をもつてそれを迎へるのだ。』

牧師。『神の御名を讃たゝへよ。イラリヤは豫言者になつた。』

客の一。『氣が違つたのだ。氣が狂つたのだ。』

イラリヤ。『俺は神と惡魔の鬪を見てゐるのだ。』

遠くから蹄の音を響かせて、馬に乘つたグサと、アダが門前に現はれる。

人々の聲。『やア來た、來た。』

客の二。『グサが來た。』

客の一。『惡魔が來た。』

十一場

グサとアダ馬より下りて庭へ這入つてくる。イラリヤ急に顏色を輝かして、いそ〳〵と出迎へる。

イラリヤ。『よく來てくれた。(一同に對つて)さアこれからだ。婚禮の祝はこれからだ。(ジプシーに合圖をして)始めた、陽氣にやつてくれ。』

熱情をそゝるやうな激しい奏樂が起る。イラリヤ力强く、グサの手を握る。グサはすぐ手を引込る。

グサ。『どうだ、約束を守つて來たらう。』

イラリヤ。『眞實によく來てくれた。どうか俺と一緒に喜むでくれ。』

グサ。『俺のやうな腹黑い奴でも約束だけは守るのだ。フン。』

イラリヤ。『オイ、ピータ、タンヤ、もつと酒を持つて來させないか。』

グサ。『イラリヤ、俺がいつか畑で「グサが他人(頭)を下げるのは、一生に一遍だ」といつた事を記憶えてゐるだらう。』

イラリヤ。(グサの言葉を氣にもとめないで)『さアく、こつちへ、一番上席がいゝ。あゝそれより俺の席に座つて貰はふ。』

グサ。『俺はお前の家の婚禮に來たが……。』

イラリヤ。(杯に酒を注いで)『グサ、まア一杯やつてくれ。』

グサ。『只約束を守つたまでの事だ。』

イラリヤ。(下僕に)『酒倉に二十年經過つた上等な葡萄酒が一本藏つてあるから、あれを持つてこい。』

グサ。(人々に對つて)『お前達は、一體誰と酒宴をしてゐるか、知つてゐるか。』

客の一。『誰とだい。』

グサ。『臆病者とさ。』

人々の聲。『この野郎、飛でもねえ奴だ。』

グサ。『イラリヤはな、世界一の臆病者だ。』

人々の聲。『この生命知らず、疊むで了へ。』

グサ。『この臆病者は俺に三度も殺されてゐる。一度は畑で、一度は火事で、一度は恐怖で殺されてゐるのだ。』

アダ。(イリヤに對つて)『オイ、手前の銀のナイフは何處にある。さア俺の胸から、血を三滴とつて見ろ。』

イラリヤ。(寂しげに)『グサ。』

グサ。『臆病者。』

タンヤ。『グサ、確り。』

ピータ。『さうだ〳〵。』

食卓を圍むでゐた人々。(立上り)『何だ、何だ。』

タンヤ。『抛つておけ、抛つておけ、他人の事には口を出さぬがいゝ。』

グサ。『俺は此奴の心の隅々まで、見屆けてやつた。此奴の魂は、虫けらのやうに、俺の足下を這廻つてゐやがる。』

メイラ。『その通りだ。こんな意氣地のない人はありやしない。』

グサ。『手前達は、こんなところへ來て、パンを喰つたり、酒を飲むだりして、耻しくねえか。』

イラリヤ。(失神したやうに倒れかゝり、額に手をあてゝ、低い聲で呻く)『あゝ助けてくれ、俺の目の前が黑くなつてきた。』

露光量違いの為重複撮影

五六の人々、イラリヤを支へやうとする。ピータ、タンヤ、卓上の肉切ナイフを取つて人々を遮る。

ピータ。『誰も此男に近づいてはならない。黑くなつた目の前が、ぢき赤くなるのだ。……』

タンヤ。『グサ、確りやれ。』

アダ。(イリヤに對つて)『さア、さつさと手前の銀のナイフを出ないかさ。』

人々の聲。『やれ、やれ〳〵。』

イラリヤ。『俺の血が皆、頭へのぼつてくる。助けてくれ、助けてくれ。』

狂氣のやうになつた群衆の叫聲、烈しい口笛、卓上の食器の毀れる音、騷然として起る。

人々の聲。『やれ、やれ〳〵。』

グサ。『手前の身體に一滴でも、男の血が流れてゐるなら、かゝつて來い。』

イラリヤ。『俺の血が皆、頭へのぼつてくる。誰か俺を押えてゐてくれ。』

イラリヤ、突然、獅子のやうにグサを目がけて飛かゝる。二三の人々が仲を隔てやうとする。

ピータ、タンヤ仲裁者にナイフを擬す。

ピータ。『誰も手出をするな。イラリヤとグサの果し合だ、どつちの加勢もする事はならない。』

グサ。(負色となる。苦しい息の下から)『アダ、アダ、早くきてくれ。』

アダ背後からイラリヤを襲ふ。その瞬間イリヤ横合から躍出て、アダに組付く。暫時の間、烈しい搏闘がつゞく。物凄い四人の叫喚が聞える計りで、舞臺は死のやうに沈り返つてゐる。

グサとアダ地上に倒れる。群衆はじり〳〵と後退りをする。ルヤ失神してメイラの腕に倒れかゝる。

人々の聲。『二人とも死むで了つた。』

ピータ、タンヤ、手にせるナイフを取落して、死骸の傍に馳寄る。

イラリヤ、手巾に顏を埋める。イリヤその右手に立ち空虛な目で、ぢつと地上を視詰めてゐる。沈默。

―― 幕 ――

露光量違いの為重複撮影

五六の人々、イラリヤを支へやうとする。ピータ、タンヤ、卓上の肉切ナイフを取つて人々を遮る。

ピータ。『誰も此男に近づいてはならない。黑くなつた目の前が、ぢき赤くなるのだ。……』

タンヤ。『グサ、確りやれ。』

アダ。(イリヤに對つて)『さア、さつさと手前の銀のナイフを出ないかさ。』

人々の聲『やれ、やれ〳〵。』

イラリヤ。『俺の血が皆、頭へのぼつてくる。助けてくれ、助けてくれ。』

狂氣のやうになつた群衆の叫聲、烈しい口笛、卓上の食器の毀れる音、騷然として起る。

人々の聲。『やれ、やれ〳〵。』

グサ。『手前の身體に一滴でも、男の血が流れてゐるなら、かゝつて來い。』

イラリヤ。『俺の血が皆、頭へのぼつてくる。誰か俺を押えてゐてくれ。』

イラリヤ、突然、獅子のやうにグサを目がけて飛かゝる。一三の人々が仲を隔てやうとする。

ピータ、タンヤ仲裁者にナイフを擬す。

ピータ。『誰も手出をするな。イラリヤとグサの果し合だ、どつちの加勢もする事はならない。』

グサ。(負色となる。苦しい息の下から)『アダ、アダ、早くきてくれ。』

アダ背後からイラリヤを襲ふ。その瞬間イリヤ横合から躍出て、アダに組付く。暫時の間、烈しい搏闘がつゞく。物凄い四人の叫喚が聞える計りで、舞臺は死のやうに沈り返つてゐる。

グサとアダ地上に倒れる。群衆はじり〳〵と後退りをする。ルヤ失神してメイラの腕に倒れかゝる。

人々の聲。『二人とも死むで了つた。』

ピータ、タンヤ、手にせるナイフを取落して、死骸の傍に馳寄る。

イラリヤ、手巾に顏を埋める。イリヤその右手に立ち空虛な目で、ぢつと地上を視詰めてゐる。沈默。

——幕——

大正十年十月十五日印刷
大正十年十一月十日發行

情火

定價金壹圓六拾錢

著者　松本泰
東京市牛込區横寺町四十三番地

發行者　後藤誠雄
東京市牛込區早稲田鶴巻町三六二番地

印刷者　谷口熊之助

製本者　福神製本所

版權所有

發行所　東京牛込區横寺町四三　聚英閣
振替東京四七八六九番
電話番町四六二番

早稲田印刷株式會社印行

露光量違いの為重複撮影

泰西名著叢書

	著作者	書名	形體及定價	特製	特價	送料	内容大意
(1)	アナトール・フランス作 谷崎精二譯	舞姫タイス	四六版	特製函入	一、六〇	八	聖僧が舞姫タイスを墮落の淵から救ひ出さんとして非凡の信仰と難行を以てしてさへ尙且タイスの麗しい肉體に對する情慾に壓倒されて終ふと云ふ飽迄現世的享樂主義を以て僧侶富豪女優の生活を繪卷物の如く描く。
(2)	アンナ・シーウエル作 槇本泰二譯	ブラック・ビューティー（黑馬物語）	菊半裁	特製函入	一、四〇	八	本書の抄譯は黑馬物語として我が國一般の譯書界を風靡せるもの、今その全譯成る。可憐なる動物心理を通じて、人間社會の愛を說き道德を語る。讀物として面白きのみならず家庭敎育上にも大に價値ある作品也。
(3)	ブーンユキン作 山縣自然譯	ツブロフスキー	菊半裁	特製函入	一四、〇	八	本篇に於て一地主の暴虐と農民の屈從を描き、他面に於て主從間のデリケイトな美しい感情を描いて讀者を泣かしめ又若き近衞士官ツブロフスキーとマーシヤとのロマンチックな戀愛等美しき亦悲痛な物語である。
(4)	マーテルリンク作 二階堂眞壽譯	戲曲ジョアゼル	菊半裁	特製函入	一、三〇	八	ジョアゼルは愛する者の生命を救ふ爲に自分の貞操を捨てねばならぬ、だが一瞬でも意識的に肉體を他人に委すことは愛の許し得ない罪過である。著者は此試練に依て女性の裏に潛む愛の本性を掴まんとしてゐる。
(5)	ビョルンソン著 波邊清譯	アブサロムの髮	四六版	特製函入	一、五〇	一〇	本書はモウパッサンの『女の一生』と共に併讀せらる可き名作にして純潔無垢なる一處女が、不幸なる結婚に生涯を誤りて、悲慘なる結末を招くに至る迄精細なる客觀性格描寫を以つてせり、其の深刻哀慘なる事言語に絕す

	著作者	書名	形體及定價	特製	特價	送料	内容大意
	岸田劉生著	劉生畫集及藝術觀	菊倍版	特製函入美本	一二、〇〇	廿八	美の創見者として現洋畫界の權威たる岸田先生の、油繪、水彩畫、素描等七十餘點を精巧原色版寫眞版となし、尙合せて先生の蘊蓄を傾倒せる美術論、寫實論、裝飾論、色彩論、素描論等十二章に亘る藝術觀を附す。
	岸田劉生著	劉生圖案畫集	支那本	唐紙美麗帙入	七、〇〇	廿八	岸田先生の藝術は裝飾の哲學とも云ふべく、此の世に美をもたらすことを以て生命とする。特に本書には純東洋的趣味を基調とした我等の日常生活に溶合せる藝術美が表現されてゐる。最近圖案界の一大寶典なり。
	カート・ライト著 福田久道譯	ジャン・フランソア・ミレエ	菊版	洋裝函入	五、〇〇	一八	田園生活、勞働生活の權威と哀愁とを好んで描いた世界の畫聖ミレエの生涯を、彼自身の日記、印象記書翰を中心として浮彫的に書いたもので、數十葉の精巧な挿畫と共にミレエの傳記書中の權威をなすものなり。
	藤森成吉著	研究室で	四六版	特製函入	一、八〇	一〇	透徹せる理性と燃ゆるが如き熱情を以て當面せる人生の葛藤を描くことに於て遠く他の凡庸作家を拔ける著者が初めて文壇に認めらるゝに至りしロマンチックな戀愛を背景とせし「雲雀」「研究室で」「發狂」等八篇也。

露光量違いの為重複撮影

泰西名著叢書

	著作者	書名	形體及定價	特價	送料	内容大意
(1)	アナトール・フランス作 谷崎精二譯	舞姫タイス	四六版 特製 函入	一、六〇	八	聖僧が舞姫タイスを墮落の淵から救ひ出さんとして非凡の信仰と難行を以てしてさへ尚且タイスの麗しい肉體に對する情慾に壓倒されて終ふと云ふ飽迄現世的享樂主義を以て僧侶富豪女優の生活を繪卷物の如く描く。
(2)	アンナ・シーウエル作 榎本泰二譯	ブラック・ビューティー（黒馬物語）	菊半裁 特製 函入	一、四〇	八	本書の抄譯は黒馬物語として我が國一般の譯書界を風靡せるもの、今その全譯成る。可憐なる動物心理を通じて、人間社會の愛を說き道德を語る。讀物として面白きのみならず家庭教育上にも大に價値ある作品也。
(3)	プーシュキン作 山縣自然譯	ヅブロフスキー	菊半裁 特製 函入	一四、〇	八	本篇に於て一地主の暴虐と農民の屈從を描き、他面に於て主從間のデリケイトな美しい感情を描いて讀者を泣かしめ又若き近衛士官ヅブロフスキーとマーシャとのロマンチックな戀愛等美しき亦悲痛な物語である。
(4)	マーテルリンク作 二階堂眞壽譯 戯曲	ジョアゼル	菊半裁 特製 函入	一、三〇	八	ジョアゼルは愛する者の生命を救ふ爲に自分の貞操を捨てねばならぬ、だが一瞬でも意識的に肉體を他人に委すことは愛の許し得ない罪過である。著者は此試練に依て女性の衷に潜む愛の本性を摑まんとしてゐる。
(5)	ビョルンソン著 渡邊濟譯	アブサロムの髪	四六版 特製 函入	一、五〇	一〇	本書はモウパッサンの『女の一生』と共に併讀せらる可き名作にして純潔無垢なる一處女が、不幸なる結婚に生涯を誤りて、悲慘なる結末を招くに至る迄精細なる客觀性格描寫を以つてせり、其の深刻哀慘なる事言語に絶す

著作者 書名 形體及定價 特價 送料 内容大意

著作者	書名	形體及定價	特價	送料	内容大意
岸田劉生著	劉生畫集及藝術觀	菊倍版 特製函入美本	一二、〇〇	廿八	美の創見者として現洋畫界の權威たる岸田先生の、油繪、水彩畫、素描等七十餘點を精巧原色版寫眞版となし、尙合せて先生の蘊蓄を傾倒せる美術論、寫實論、裝飾論、色彩論、素描論等十二章に亘る藝術觀を附す。
岸田劉生著	劉生圖案畫集 伊上凡骨彫刀	支那本 唐紙美麗帙入	七、〇〇	廿八	岸田先生の藝術は裝飾の哲學とも云ふべく、此の世に美をもたらすことを以て生命とする。特に本書には純東洋的趣味を基調とした我等の日常生活に溶合せる藝術美が表現されてゐる。最近圖案界の一大寶典なり。
カート・ライト著 福田久道譯	ジャン・フランソア・ミレエ	菊版 洋裝 函入	五、〇〇	一八	田園生活、勞働生活の權威と哀愁とを好んで描いた世界の畫聖ミレエの生涯を、彼自身の日記、印象記書翰を中心として浮彫的に書いたもので、數十葉の精巧な挿畫と共にミレエの傳記書中の權威をなすものなり。
鹿森成吉著	研究室で	四六版 特製 函入	一、八〇	一〇	透徹せる理性と燃ゆるが如き熱情を以て當面せる人生の葛藤を描くことに於て遠く他の凡庸作家を拔ける著者が初めて文壇に認めらるゝに至りしロマンチックな戀愛を背景とせし「雀蜂」「研究室で」「發狂」等八篇也。

櫛田民藏 大山郁夫 森戸辰男 吉野作造	**民衆文化の基調**	四六版 上製 美本	一、三〇 八一
有島武郎 室伏高信 長谷川如是閑 北澤新次郎	**新社會への諸思想**	四六版 上製 美本	一、七〇 八〇
文學士 土田杏村著	**靈魂の彼岸**	四六版 佛蘭西式裝幀	一、七〇 八〇
生田長江著	**徹底人道主義**	四六版 特製洋裝美本	三、〇〇 一八〇
堺利彦著	**恐怖・闘爭・歓喜**	四六版 特製洋裝函入	二、〇〇 一〇〇

一資本家社會に於ける矛盾の發展　櫛田民藏
二民衆文化の原理　大山郁夫
三生存權と勞働の藝術化　森戸辰男
四改造とは何ぞや　吉野作造

一ソリダリテイの法理に就いて　長谷川如是閑
二ギルド社會主義の原理及其發達　室伏高信
三現下に於ける勞働組合の諸問題　北澤新次郎
四ボイツトマンに就いて（百五十頁）　有島武郎

天國は無智の天國であり、樂園は眠りの樂園である。エデンの園の門扉から永久の苦腦を背負つて追放されたイブとアダムとは其處に新しい地上の春を知つた。裸體の美女と美男とは初めて人間の再生を謳つた。

資本論の壘に籠る社會主義者に非ず、象牙の塔に隱れたる哲學者に非ず、而も透徹せる哲學根底に燃ゆるが如き人道的信念を有つ生田氏の文と想とは我が論壇の偉觀にして、本書は氏の數年間に亘る全論文集なり。

日本社會黨の巨頭たる著者が積年の沈默を破つて發表せる晩近社會思想及社會運動に對する諸研究にして、從つて我が思想界に大なる問題と論爭とを喚起せるもの、最近の氏の論理的立場を語る唯一の學術的著作。

101
208

375
97

終